

AJPS NEWS

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE



- WORLD CUP FRANCE '98 PART-1 — フランスの夏、我々の仕事 —
- PHOTO & ESSAY — 求めるものを信じて —
- WORLD CUP FRANCE '98 PART-2 — AJPSアンケート —
- INFORMATION



アルペールビル五輪で見たレースは衝撃的だった。

それから彼に獲りつかった。92/93シーズンからワールドカップ3連覇を成し遂げた荻原。

ここ2シーズンは低迷しているが、'97年世界選手権では完全試合を成し遂げている。そんな強さをもう一度見に、'99年2月の世界選手権に出掛けたい。

撮影者
プロフィール



岸本 勉
TSUTOMU KISHIMOTO

1969年1月3日 東京生まれ。
'90年からスポーツ写真の世界へ。
'95年までバルセロナ(ESP)、マイツ(GER)を拠点に取材活動。
オリビックやワールドカップから、市民スポーツまで幅広くスポーツの世界を写す。

目次 CONTENTS

- 3 WORLD CUP FRANCE'98
PART-1
フランスの夏、我々の仕事
- 8 PHOTO & ESSAY
- 10 WORLD CUP FRANCE'98
PART-2
AJPSアンケート
- 12 INFORMATION

「スポーツの季節感」

赤木真二

10月中旬、まだ半袖で過ごせる東京からアムステルダム経由でローマに飛ぶ。1泊したアムステルダムは10度以下。コートが欲しい。ローマは東京と同じ気候。陸路で北上しベルージャに寄り、さらに北上してヴェネツィアで友人に会う。雷鳴混じりの激しい雨に打たれた翌朝、遠望する山々には雪が輝いていた。北イタリアは秋色。空路アルプスを超えて晚秋のただいまのミュンヘンへ。晴れ間はいいが雨は冷たい。雨上がりのミュンヘンを後にミラノに戻り、トリノまでドライブ。夜の試合ではコートの衿を立て、その後暖房を入れてミラノに走る。10月末に帰国。大阪でのナイトゲームはセーターなしで充分であった。翌日盛岡へ移動。紅葉の美しさと秋の空気を満喫。そして11月、殆んど雨の降らない東京は緊張感が欠けてしまうほど暖かい。頭のなかで季節感が右往左往するのがわかる。

「暖冬」、「冷夏」と天候不順は地球規模の現象である。暑い夏、寒い冬の温度差をなくそうと人類はせっせとエネルギーを使い、地球全体を暖めてきた。今や、「年中滑れるスキー場」もあるし、「冬でも波が打ち寄せるプール」すらある。都会的な発想から生まれるこうした施設に、人々は何を求めるのか。もっと自然に、もっとシンプルに、太陽を肌で感じるようなスタイルに戻れないのだろうか。

「人工芝を剥がして天然芝に戻す球場が増えているんですよ。平日でもデーゲームを組んで試合をするチームもある。これはベースボールを本来の姿に戻そうという発想から来ているんです。」メジャーリーグ取材の長かった故 佐瀬穂氏が昨年の座談会の後に言っていたのを思い出した。芝の香りと太陽の光。「スポーツの季節感」はそんなところに存在しているのではないだろうか。

WORLD CUP FRANCE '98 PART-1

— フランスの夏、我々の仕事 —



大会史上最多の32チームが参加して行われたサッカーワールドカップフランス大会。9都市を舞台に、5週間に及ぶ期間中、さまざまな分野で活躍された6人のプロフェッショナルに登場していただきました。

「日・韓共同開催に向けて」

2002年ワールドカップ
日本組織委員会事務局
広報部 小山敏昭

4年後にせまった2002年FIFAワールドカップ日本韓国大会に向けて、1998年フランス大会は日本組織委員会(JAWOC)にとって、「勉強」する最後の大会でもあった。今回JAWOCは、理事、実行委員、事務局員や10の開催候補自治体の首長、関係者など、100人以上の人たちを派遣、大会運営の視察、フランス組織委員会(CFO)との打合せ等を行った。小生が所属する広報部でも2人の部員を大会一週間前から、大会終了一週間後まで約二ヶ月フランスに送り、さらに残りの部員も一、二週間のスケジュールで視察させた。CFOの広報業務の中でも、特に報道対応、アクリエティーション、メディアセンターの運営などを実際に見て体験した。

しかし、今回こうした研修の他に

もう一つの大きなテーマが、日本と韓国の初の共同作業となるPRブースの設置。FIFAワールドカッププレセッションの開催であった。共同開催が決定した後、韓国組織委員会(KOWOC)とJAWOCの間では、実務作業を進めるため分科会を立ち上げ、広報でもPR分科会を東京、ソウルで交互にほぼ毎月開催してきた。このPR分科会でレセプション、PRブースのための諸協議を行った。日本語とハングル文字、言語のギャップに加え、価値観の違いなど共同作業の難しい壁をなんとか乗り越え、英、仏、西、独語のブローザー、NTSCやPALなど各種のビデオ、それにレセプションで参加者に配布する土産品等を完成させた。

大会も終盤に入り、準決勝の終了後の7月10日、FIFAのオフィシャルホテルである、メリディアン・モンパルナスホテルのボウルルームでFIFAワールドカップ・レセプションが開かれた。

ワールドカップは次の開催国がブレス、FIFA関係者に向けて、レセプションを開催することが恒例化されている。2002年大会の日本、韓国も共同で一大セレモニーを行った。

レセプションは「シンプル」(素)をテーマに、両国関係者やゲストの挨拶、スピーチなどは一切やめ、JAWOC、KOWOCで共同制作した英語、フランス語、スペイン語のビデオテープを流すのみにとどめた。

ただ、両国のカラーを出すため、両国が独自の料理を提供することを決め、JAWOCは寿司を、KOWOCは

チヂミを用意した。

当初はどれくらいの人たちが来場するか心配事であったが、新たにFIFA会長に選出されたプラッター氏をはじめ、CFOのランベルト事務総長らフランス大会のVIP、FIFAのヨハンソン、イサハヤト副会长ら大勢の方々が訪れた。

さらにプレス関係者も1500人以上の人人が入り、会場は熱気に包まれた。出席者には帰り際に英・仏・西・独語別に作られたプロローザーと、お土産用のバッグを配り、日韓両国の協調を訴えた。

予想以上の世界の人々の関心と期待を肌で感じ、レセプションの成功の嬉しさとともに2002年大会の責任を改めて痛感した。

「ワールドカップでの仕事」

キヤノン販売(株)
報道機材課 大川口佳延

今年の6月10日から7月12日の間、スポーツ大会としては五輪をしのぐ、世界最大のイベントであるワールドカップサッカー大会がフランスで開催されました。我々キヤノンは、大会期間中トッップスポンサーとしてプロ・報道カメラマンに対し、各種のサービスを提供しました。キヤノンとワールドカップとの関わりは、1978年アルゼンチン大会からで、今回のフランス大会に至るまで6大会、20年間スポンサーを続けています。当時(アルゼンチン大会)のカメラマンの使用機材もほとんどがマニュアル機でしたが、今回のフランス大会ではデジタルカメラを使用するカメラマンが多く、各社が争って写真を早く送る努力をしていました。また、カメラマンに対して取材に関する色々な制約が増え、個々のカメラマンの負担が増えたと思われます。

キヤノンとしては、オフィシャルスポンサーとしてすべてのカメラマンに対し、機材の修理や代替え機材

の貸出しのサービスを実施しました。今回は、期間中9都市10競技場をカバーする為に5チームがそれぞれ2~3競技場をカバーすることになりました。1チーム4名(カウンター2名・修理者2名)で構成し、チームによっては1日に片道100km~250kmの距離を移動しなくてはなりませんでした。その為、各チームに専属のプロドライバーを雇っていました。結果的には開会式の前日までエーフラント、TGVがストライキをしていたので、車での移動は力を奏し、我々としては助かりました。

今回は報道関係者に対するサービスとして、約80台のカメラ、350本のレンズ、600台のファックスマシン、300台のフォトコピー機を用意し、各会場にセットしました。そして、フランスワールドカップに関わった修理者は、約50名でした。メンバーも世界各国から集め、各チームにフランス人・イタリア人・アメリカ人・中国人など混合で仕事をす



る状態で、仕事以外の休日もチームのメンバーと共に過ごす事が多くありました。私にとっては前回アメリカ大会に続き2回目で、ヨーロッパは初めてでしたが、幸いメンバーにフランス人がいた為、休日にはミュージアム・観光地などを見学する事が出来、本格的(庶民的)なフランス料理も食する事が出来ました。

今大会で一番感じた事は、前述したように取材陣の使用する機材としてデジタルカメラが多い事でした。前回のアメリカ大会では、アナログのネガ電送機が多く目立ちました

が、今回はデジタルカメラを使用し、その場から世界各国に電送していました。10分たらずで日本にも送られていきました。日本から取材に行かれた新聞社もほとんどが、デジタルカメラを使用されていて、今後はデジタルカメラの使用が益々増えてきて、我々としてもデジタルに対応出来る測定器、代替え機材等を揃えなくてはならないと感じました。最後になりましたが、2年後のシドニーオリンピックでキヤノンの一員として皆様のお手伝いが出来る事を願っています。

「データが裏付ける プレイヤーの資質」

大東文化大学 助教授
日本サッカー協会科学研究委員
大橋二郎

チケット騒動の最中6月13日から6月28日の間、日本代表チームの対戦する3試合のゲーム分析を目的にフランス大会に出かけた。ゲーム分析とはゲーム内容を様々な項目ごとに数値データとしてとらえ、統計処理することによって戦術分析やトレーニングに役立てようとするものである。日本サッカー協会でもこのような調査の歴史は長く、分析方法も徐々にではあるが確立しており從来から代表チームのゲーム後には強化スタッフにレポートするよう気がしてきた。今回のワールドカップに関しては、予選から本大会にかけて強化スタッフは私たちの調査活動に余り関心を示さなかったが、ワールドカップ初出場の代表チームの戦いぶりを数値データとして残してきたいという私たちの意向に賛同してくれた研究仲間たちによって本大会のゲーム分析調査を実現することができた。

具体的にはVTRカメラにマイクを取り付け、ボールを画面に入れたアンダルを保った映像を録画しながら

ら、ボールに関係するすべての選手とバスの流れを音声トラックへ実況録音すること、また何人かの選手の移動軌跡を記録するという作業であった。VTRの再生画面からは、選手間で何回バスが通ったのか、又はミスがどの位あったのかというようなバスに関する分析や両チームのボールキープ時間を測ること、また選手の動きの分析では移動距離と行動範囲を知ることができるわけである。

さて、今回分析したデータをすべてご紹介することは紙面の都合でできないが、その中で注目すべき点と言えば、対アルゼンチン戦最後の15分に日本のボールキープタイムが55パーセントと相手を上回ったことであろう。このゲームでは後半の30分まではアルゼンチンが常に6対4で優勢であったにもかかわらず、日本チームの不得意なゲーム終了に近い時



昨年の最終予選ホームゲーム4試合では、前半(45分)には5,500m~6,500mとチームの中で精力的に動いているものの、後半(45分)になると常に5,300m程度に落ちていた。本大会でのデータのうちアルゼンチン戦の後半は5,068mと少なかったが、残りの2試合では7,247m(クロアチア戦)、6,213m(ジャマイカ戦)と非常に精力的に動いていたことがわかった。特に酷暑の中で戦ったクロアチアの最後の15分には2,636mと驚異的な運動量を示した。中田選手はとにかくバスセンスに評価を受けているが、効果的なバスを出すためには自分が良い状態でバスを受けるための動きが必要であるし、多くの時間をディフェンスのために動かなければならない。中田選手のワールドカップでの動きは、攻撃的なミッドフィルダーとして必要な「最後まで動きが落ちない体力要素」を備えている証拠を示したものと言える。最終予選との違いの理由は、フィジカル面でのコンディショニングが成功したことと、中田選手自身の成長を考えられる。

「夢を伝える画像電送」

大日本印刷(株)
DNPアメリカ 新井一輝

1982年にスペイン大会をTV中継を通して見て以来ワールドカップの虜になってしまいました。祖国の威信とプライドをかけて男達が戦う姿というのは何と美しいものか、もしその世界にサッカーがなければきっともっと頻繁に戦争がおきるのだろう、とその時を感じました。同時に真っ先に考えたのが「自分は死ぬまでに後何回ワールドカップが見られるのだろうか?」ということでした。当時高校生だった僕にとっては、ワールドカップを開催国で見るというようなことはあまりにも果てしない希望でしたが、「それでも死ぬまでは必ず開催国で観たい」。

と夢見るようになりました。

日本代表は岡野選手のゴールで(勿論岡田監督以下全員で勝ち取ったゴールですが)、悲願であったワールドカップ1998フランスへのチケットを手に入れましたが、その瞬間に既に印刷会社として時間と品質に対する戦いが始まっていました。報道並みのスピードで出版以上のクオリティを確保し、出版社に提供するにはどうしたらいいか?もしかしたらサッカーが好きで好きでしょうがない人はその雑誌を一生大事にとつておくかも知れないし、棺桶にいっしょに入れて欲しいという人もいるかも知れない。そのような状況で、大日本印刷がバルセロナオリンピック以来提供してきた画像電送というサービスを、1都市開催のオリンピックと違ってフランス全土が舞台となるワールドカップで、どこまで進化させ、洗練させて提供できるかを、フランスのパートナーであるブリプレスグループ(Wace France)とファクスを通じてのシェミレーションを開始しました。

初戦のトゥールーズではパリまで戻る時間は絶対にない、それなら街の小さな製版会社に富士写真フィルムが提供してくれるという高性能フラットベッドスキャナーを持ち込んでフランステレコムと交渉して、ISDN30回線をテンボラリーにつなぐしかないと判断し、実行に移し、試合終了後8時間で高解像度データを東京のサーバーへ電送するということを可能にしました。延長のない予選リーグと違い決勝のフランスvsブラジルは、前回覇者と開催国というワールドカップ史上稀に見る絶好のカードで、どちらが勝利してもパリの街は大混乱に陥るのは必至という状況の中、90分以内、ゴールデンゴール、PK戦の場合のそれぞれについて混乱のパリ市街をフィルムを抱えてどう通り抜けるかのロジスティクスを何度も何度もシミュレーションしました。結果はご存じの通り開催国フランスが地元の熱狂的な応援を受け、前回王者を全く寄せつけず史

上7ヵ国目のワールドチャンピオンに輝き、第2次世界大戦のパリ解放時の3倍の人でごった返すパリ市街を抜けてフォトトラボヘフィルムを運び、ポジフィルム処理で試合終了から8時間以内に画像電送を実現しました。



今回の経験で実感として理解できたことは「サッカーは地球を一つにする。」ということ。誰もが日曜日の夕方から家族を放っておいて働きたくないと思う（特にバカンスの国フランスでは）けれど、フォトトラボやプリプレスのオペレーター（彼等は皆熱狂的なサッカーファン）が現像や分解を行ってくれるのは「悲願のワールドカップ初出場を果たした日本代表の勇姿を日本のサッカーファンが待ち望んでいます。貴方がたが現像し、分解して電送する写真は、1億3千万人の日本国民に凄まじい熱狂と興奮をもって迎かえ入れられるのです。」という言葉に動かされていましたからだと確信しています。

1982年に高校生だった私は自分がワールドカップ開催国に来れるなんて想像も出来ませんでしたが夢を持ち続けていたからこそ16年目に実現できました。地元フランスの優勝を目のあたりにして、あのシャンゼリゼの大フィーバーを肌で感じて私は思ったのです。「夢は大きく持つこと。出来るだけ高いところに理想をおいてそれをイメージした方が人生は楽しい」と。ですから、私はイメージし続けます。4年後、2002年大会で地元日本代表が熱狂的な声援を背に受けて決勝を戦う姿を。そして

て・・・、言葉には出来ませんが、その時我々が幸せな気分でいられることを。

「世界から有数のプロカメラマンがやってくる」

富士写真フィルム（株）
宣伝部 海外グループ 浦中 稔

富士フィルムはオフィシャルスポンサーとして、契約で「フィルム現像サービス」を公認カメラマンの皆様に提供する義務がある。この準備には、膨大な時間と人手が必要となる。1986年のメキシコ大会から現像サービスを続けてきているが、開催場所が変わる度にサービスへの体制も自ずと変化を遂げる。試合数、スタジアムの場所、スタジアム間の距離等々。国民性も関係してくる様な気もす。

'98フランス大会は、スタジアム数が10、チーム数32、そして、合計64試合の大会となり、今世紀最大の規模となった。また、日本チームが初めて出場する大会となった。どれだけのプレスが集まるのか？一刻でも早く大切なフィルムを現像しカメラマンの方々に返却することが数百名に及ぶプレスサービス実施部隊の使命であるが、はたして、どれだけの準備をしなくてはならないのか？先行き不安になったことを記憶している。カメラマンの方々も同じ気持ちで、取材の手配を組まれたのではないかろうか。

フランス大会では、各スタジアム内に設置する現像処理機器（ミニラボ）設備以外に、迅速サービスを提供するため、試合の注目度に応じ臨機応変に対応できる様、ミニラボを積んだトレーラーを別途3台用意して、10会場を巡回させ、現像処理能力の増強を図り万全を期した。数ヶ月経った今でも現場の緊張感が目に浮ぶ。

今大会初めて登場し、大活躍をし

たこのラボ・トレーラーは、大きなもので、長さ16mもあり大型コンテナ車を思わせるほどデカイ。最新鋭の現像機器を搭載したトレーラーは町で見かけるミニラボショップ数店舗を一つにまとめたぐらいの処理能力を持っている。各スタジアムに移動する前は、現像液を抜いた状態で移動し、スタジアムに到着したら、スピーディに現像液を調合し準備する。この作業を何度も何度も繰り返す。高品質を維持するためには、技術スタッフも必ず同行する。パリの会場が終了したら、次ぎは、ボルドーへ移動、またその次は別の会場へと、大会期間中フランス全土を駆け回ることになる。

一方、リバーサルフィルムは、これまで、準備が大変である。フランス全土の8ヶ所のプロラボと現像の契約を行い、各ラボの品質の確認を技術スタッフが行い、当社の最上級の品質レベルに合わせるため、技術指導を実施、レベルアップを図る。その為には東京のスタッフも現地に乗り込み品質向上に努力する。現像品質が安定し、納期に間に合わせるには、全てがうまく噛み合わないと可能にはならない。試合のある日は、徹夜で現地ラボスタッフと共同で働き、現像に問題ないか目を光らす。

皆んなの努力が結集して初めてあたり前のサービスとして提供できることになる。

あたり前のサービス一無意識に安心してもらえるサービスの提供これが大切だと考えている。この、あたり前のサービスに、カメラマンの方々から頂く、有り難うの一言が今までの苦労を癒してくれる。



「代表チームと行く ワールドカップ」

ジャパン・タイムズ
運動部記者 木ノ原久美

2大会連続2回目の「出場」——今年の夏、国内予選ならぬ社内予選をなんとか勝ち抜いてサッカーのワールドカップ・フランス大会を取材した。

前回大会の取材と今回との決定的な違いは、もちろん、日本が出場していたことだ。だが、この差は大きかった。

4年前、アメリカ各地のプレスルームで韓国人と間違われ、日本人とわかると今度は「出場しないのになんで取材してるんだ？」と怪訝そうな顔をされた。プレススタンダードの記者席も、ビッチのコーナーが欠けて見えないような最悪の場所が多かった。自分の国が出でない者は「よそ者」だったのだ。

ある夜遅く取材から戻ってホテルのレストランに入ると、ついさきほど行われた試合で負けたチームの記者が片隅にいた。彼は、泣いていた。かわいそうにと思うより、羨ましい、と思ったのを覚えている。「たとえ一次で負けて泣いてもいいから、今

もちろん、人気のあるイングランドやJリーグ絡みの選手のいるチームに的を絞って大会を見た。

だが、一次と二次リーグ以降では取材の対応も違う。本大会出場は果たしたとはいえ、二次リーグ以降はチームのみならず記者もまさに弱肉強食の世界。一次で敗退した国の記者にスタンドの記者席は確保されでおらず、このため、フリーランスの記者はもとより、新聞や雑誌の記者も、連日スタジアム担当広報責任者とのバトルを繰り広げることになった。その対応のいいかげんさとったら・・・。実際のところ、これほどエネルギーを吸い上げられる作業はなかった。2002年の大会では、あのような混乱と失態はないことを実行委員会に切にお願いしたいものだ。

「よそ者」から「当事者」の立場に昇格（？）したもの、まだまだW杯では新参者。それでもそこまでしか味わえないものの、その立場でなければわからないことがある。今回日本が出場した意義はとても大きい。そして、たとえ仕事が煩雑になっても、自分たちのチームがそこにいるということが、なによりもうれしく、大きな張りあいだったことは間違いない。



Photographs by S.AKAGI

PHOTO & ESSAY by Rimako Takeuchi



「求めるものを信じて」

写真と文：竹内 里摩子

私は「あんなのスポーツではない」と、観客に偏見を抱っているようでは地に足がついていない。採点競技なんかはスポーツではない」と。スポーツとは陸上競技のように、「どんなに格好悪くても、明らかに強い人、明らかに速い人がチャンピオンであり、それこそが眞のスポーツであるのだ」と信じていた。

しかし恩師に連れられ、いやいやながら新体操の撮影に乗り込んだとき、私が胸を張つて大事に持ち込んだ偏見はシャツを押すことにもろく崩れ、そのときから新体操は離れない被写体となってしまった。

なぜこれはどこまでに惹かれてしまうのか。それは選手から湧き出るオーラにあった。香りや残像を残し、姿や色を覚えていくオーラ。このオーラの正体を解き明かしたい。それを写真に表現したい。その一心で、新体操との闘闘の日々が始まったのである。

あれは19歳の春だった。
そしていま私は新体操にこだわったままである。

しかし、月日が過ぎれば当然選手の頃ぶれもルルも終わる。採点基準の明確化をはかつたことにより、作品の流れや、内面を表現するための「圓」などは軽視され、目に見える柔らかさやテクニックの深さを誇る選手に高得点が与えられるようになつた。

かつて、選手を包み込み、私の心の奥深くまで入り込んできたオーラなどは、いまではもうどこにもなくなつてしまい、あるいは離伎団のような柔らかさと、幾何学模様のような動きのみとなつてしまつたのである。

だが私は時が流れるのを感じと待ちながら、これからも新体操を追い続けていきたい。いつか、選手の生の呼吸を感じさせてくれることを、私が探しているオーラに再び出会えることを、信じて。

WORLD CUP FRANCE '98 PART-2

— AJPS アンケート —



日本代表の初参加に伴い、各メディアへのプレスカードの割り当ては競争率の高いものとなりました。記者(PRE)、カメラマン(PHO)へのバスの配分のいき方は前号AJPS NEWS No.15で触れた通りです。希望者多数の中、フランスでIDカードを手にしたのは99人。その他に14枚のテクニカルバスが認められ、合計113人がワールドカップの報道に携わりました。この数字は大変多い

のですが、それでもなお希望者全員には行き渡らず、一般席から取材された方も大勢いらっしゃいました。

今回は、IDカードの有無にかわらず、フランスワールドカップを取材なされたフリーランスの方々を対象にアンケートを実施しました。対象者数55名は、記者(PRE)27名、カメラマン(PHO)27名、テクニカル1名、と言う構成で回答率は48%でした。

(1) 【発表媒体】

カメラマンの多くは媒体の具体名を明記されていないため、実際の出版物はより多いと思われます。又、今回代表チームの参加でTV、ラジオのレポート、インターネットの情報源としての配信作業も多く見られます。

- 読売新聞、東京新聞、大阪新聞、日刊ゲンダイ、夕刊フジ、赤旗
- 週刊文春、週刊朝日、週刊ポスト、週刊ブレーボーイ、サッカーマガジン、週刊スパ、アサヒ芸能、少年ジャンプ、ブライマー、サンデー毎日、サッカーダイジェスト、スポーツサビオ、ザ・テレビジョン etc.

- スポーツグラフィックナンバー

- 中央日報、サッカーアイ、サッカーニュニック、スコラ、ボーチェ、ザ・スポーツ、ストライカー、メンズウォーカー、BLT、朝日TVニュース

- スコラ特集号、毎日新聞特集号、読売新聞特集号、JFA OFFICIALブック、朝日新聞特集号、世界文化社特集号、集英社写真集、BIGIN、BLUE、ライブ

- TBS-TV、NHK、SKY Perfect TV、BAY FM、SBS静岡放送、NHKラジオ

- マイクロソフト・インターネット、毎日インターネット

- 2002年NEWS

- フォートキシモト、アプロボットエージェンシー、Jリーグフォト

(2) 【希望した試合は全て取材できたのか?】

1日1試合の取材を原則とすると1次リーグは17日間、決勝トーナメントは10日間がマキシマムです。表1、表2で見ると、毎日しかも全ての試合を撮影したカメラマンが5割に達しています。又、取材が許可されなかつた試合数、表3に開いて見ると、カメラマンの場合フィールドに入れなくともスタンドに入れた場合は「取材した」と判断したため、取材不可率の%は減っています。しかし決勝トーナメントですら不許可試合が平均1試合なのに比べ、記者の方々は現場に居ながらスタンドに入れなかつたケースが多かったことを物語っています。決勝トーナメントの初日、パリでのブラジル対チリ。準々決勝、ラッシュでのフランス対イタリアの2試合は殆どの記者が不許可と記しています。同時に、チケットの配布、又キャンセル待ちの方法に関して不満の声が多く、2002年の課題と言ふ意見が多く聞かれます。

【取材した試合数】

表1 ① 17試合 ② 14試合以上 ③ 10試合以上

	PRE	PHO
① 17試合	8%	75%
② 14試合以上	50%	40%
③ 10試合以上		10%

表2 ① 10試合 ② 8試合以上 ③ 6試合以上

	PRE	PHO
① 10試合	27%	45%
② 8試合以上	18%	72%
③ 6試合以上	50%	40%
		10%

【希望した取材できなかつた試合数】

表3 ① なし ② 1~3試合

	PRE	PHO
① なし	50%	50%
② 1~3試合	90%	10%

決勝トーナメント

PHO 63% 37%

(3) 【試合後原稿締切までの時間】

カメラマンに関してはネガフィルムの現像時間が2~3時間かかり、2時間以内の電送は無し。又、3の「それ以上」の数値が高いのは速報性の少ない媒体が多いと思われる。

表4	① 2時間以内	② 4時間以内	③ それ以上
開幕、決勝戦 PRE	62%	22%	16%
PHO	--	30%	70%

*計5試合の平均

(4) 【プレスセンターの評価】

電話、机、資料検索、そしてプリントアウトに関しては8割の人が過不足無しとしますが、ピーク時のワーキングスペース確保は開場によって差があり、パリ、サンドニのスタッフ・ド・フランスでは「デスクが不足していた」という声が聞かれます。又、プレスセンター内の食事に関しては厳しい評価があります。日本人の舌が肥えているのか?それともフランスに期待してすぎたのか?この点も2002年に向けての検討課題の1つと考えられます。

表5	① 充分	② 普通	③ 不充分
電話	42%	37%	21%
デスク	29%	54%	17%
資料	29%	54%	17%
プリンター	58%	25%	17%
食事	--	33%	67%

(5) 【移動に関する質問】

TGVでの移動は殆んどパリからの往復を可能にしていたようで、表-6のような結果となっています。又、プレスに対する駐車場の整備は素晴らしい、重い器材の多いTV、PHOの関係車両はプレスセンターの間近かに駐車できるように計画していました。

表6	「列車 80%、ライト 20%」が全体の80%
	「車 80%、列車 20%」が全体の15%

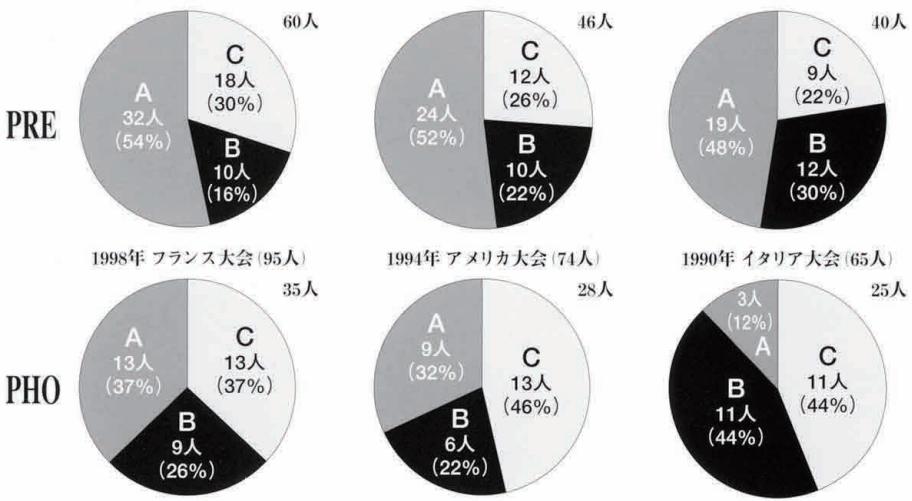
(6) 【プレスカード取得者数の変遷】

今回のフランス大会を取材した方々のキャリアは、表-7の通りです。70年代から、80年代から、そして前回94年と今回98年という区分をしてみると、人気のバランスは保たれています。また、今回のアンケートと直接関係はありませんが、90年イタリア大会から98年フランス大会までのプレスカード取得者をまとめて見るとグラフ-8のようになります。人気のバランスは確実に崩えています。そして新聞社、通信社の比率が高くなっています。そして新聞社、通信社の比率が高くなっています。

表7	① 初めて	② 2回	③ 3~5回	④ それ以上
	15%	18%	45%	22%
'98	'94	'82~	'70~	



グラフ-8



A: 新聞・通信社 B: 雑誌 C: フリーランス

Information

コダック

米コダック社、EI100の感度で最も鮮やかなプロ用リバーサルフィルムを発表。感度100の使いやすさと、高い彩度と粒状性を実現した「コダックプロフェッショナルエクタクロームフィルムE100VS」

米国イーストマン・コダック社は、フォトキナ'98の会場において、プロ用リバーサルフィルムの新製品「コダックプロフェッショナルエクタクロームフィルムE100VS」を発表しました。

E100VSは、非常に鮮やかで高い色飽和度を持つ、EI(露光指數)

100の感度のデーライトタイプリバーサルフィルムです。名称の最後にしているVSは、それぞれVivid(目の覚めるような)、Saturation(色飽和度)を指しています。鮮やかでダイナミックな色再現に加え、EI100の実効感度を持つため、スタジオはもとより、フィールドでの撮影でも使いやすく、幅広い用途に使用できます。鮮やかな色再現を必要とする商品写真やファッショントレーディングなどのコマーシャル分野はもちろん、風景、自然、スポーツなどの野外撮影にいたるまで、よりビジュアルに訴える、インパクトの高い作品作りに最適です。

このフィルム用に新しく開発されたカラー技術により、EI100の感度とニュートラルなグレースケールを保ちつつ、非常にダイナミックな色再現が可能になりました。また、コダック独自の「T粒子」乳剤技術の採用により、現行の感度100のフィルムとしては最高レベルのシャープネス(鮮鋭度)を持っています。1万分の1秒から10秒のシャッタースピードまでフィルター補正が不要な、優れた相反則不軌特性をもっており、さらに+1まで(EI200相当)の増感が可能で、撮影条件の幅が大きく広がります。

ケースから出さなくてもフィルム種類の識別ができるよう、フィルムケースには半透明のものが採用されており、フタには様々な撮影情報が書き込まれる記入スペースが設けられています。パトローネ部も書き込みやすいマット地を採用しており、増感指定などを確実に記入できます。

E100VSは、35ミリサイズの1本パック、20本プロパック、120サイズの1本パックと5本プロパック、220サイズの5本プロパック、4×5インチサイズ(10枚入り)、8×10サイズ(10枚入り)が、米国で来年1月から発売される予定です。なお、E100VSの日本での発売時期、価格は未定です。



堀内カラー

超高画質なプリントを実現する大型デジタル出力機「ラムダプリント」受注開始

堀内カラーではダースト社製「ラムダ」を導入し、12月より受注を開始いたしました。同出力機はデジタルの画像データを最大400dpiの高解像度で銀塙ペーパーに出力するもので、文字入れもRIP処理により小さな文字も非常にきれいに再現が可能になりました。特に大型サイズの出力では従来の銀塙プリントを凌ぐシャープネス、色再現で超高精細な画質が得られます。また、最大50インチ(1,250ミリ)幅のロールペーパーに出力が可能で、データーからの受注はもちろん、フィルムからの受注でもデジタル変換作業を行います。



ミノルタ

ミノルタ< a-9 >登場

ミノルタ株式会社は、98年12月19日、プロ仕様の35mmAF一眼レフカメラ<a-9>を新発売致しました。創業以来70年にわたって培ってきた、光学技術・精密加工技術等カメラ創りに因る技術蓄積の集大成として、プロ及び写真愛好家をターゲットとしたオートフォーカス一眼レフカメラのフラッグシップ機の登場です。

・主な特長

プロユースに応える高性能、高信頼性のボディ、表現の幅を最大限に広げる世界最高レベルのパワースペック・基本性能を搭載。

1. 世界最速1/12000秒、シンクロ1/300秒のシャッター

歴代一眼レフカメラ最速のシャッター速度1/12000秒を搭載、大口径レンズを使用することによって、激しく動く被写体のぶれを最小限に抑えたり、背景を大きくぼかすといった思い切った深度表現を可能にします。

2. フィルム巻き上げ速度、最高5.5コマ

被写体の一瞬の揺れや表現の動きを見逃すことなくとらえられるよう、最高毎秒5.5コマ(ワンショットAF、またはマニュアルフォーカス時)でフィルムを給送します。

3. 視野率100%の高品位ファインダー

ファインダーを通して見える像と、フィルムに写込まれる画像とが完全に一致するよう、視野率100%を達成しました。これにより撮影者の意図した構図をそのままフィルムに定着させることができます。また、ファインダー倍率0.73倍、アイポイント22.1mm(ハイアイポイント仕様)を確保、見やすさを最優先した設計になっています。さらにフォーカシングスクリーン(焦点板)には、従来機種に搭載していた明るくくっきりと見える、ミノルタ独自の「アキュートマット」をさらに改善した、新聞発「スエリカルアキュートマット」を採用、より自然な見えを提供します。



4. 金属外装、防塵防滴性への配慮

ボディの衝撃性を向上させるため、外装部品にステンレス(SUS304)と亜鉛ダイキャストを採用しました。厳しい自然環境下でも安心して使用できるよう、レリーズボタン内部をラバーシールド処理を施し、ファインダーを樹脂で密封するなど、各所に防塵防滴処理を施しています。

5. AFシステム、測光方式の進化、システムアクセサリーの充実

シャッター音、フォールディング感等、視覚・聴覚・触覚といった感覚レベルにおいても、撮る手応えを充分に感じて頂けるよう、きめ細かな配慮を施しました。使い勝手を考え写真を撮る醍醐味を多くの方に味わっていただきたいカメラです。

メーカー希望小売価格 250,000円(税別)



PENTAX

機動性に優れ、高画質な描写が得られる中判一眼レフカメラ、TTL絞り優先自動露出採用の「ペンタックス67 II」

旭光学工業株式会社は、TTL絞り優先自動露出機能をはじめ専用ストロボ(PTZシリーズ)に連動する自動調光機能、多重撮影機能、タイム露出機能など、多彩な機能を備えた6X7センチ判のシステム中判一眼レフカメラ「ペンタックス67 II」を発売いたします。愛用者の意見を参考にしながら「さらなる使いやすさ」の実現を意図して開発された製品です。ダイヤル・レバー操作方式の採用や撮影機能の大幅な自動化・多機能化を図り、しかも現行の交換レンズ・アクセサリーとのシステム互換性を満たした設計を施すことで、ペンタックス67のもつ本来の使いやすさをさらに発展させています。

主な仕様 (AEペンタブリズム67 II付)

画面サイズ 55mm×70mm

シャッター速度 絞り優先: 1/1000~30秒(無段階)

マニュアル: 1/1000~4秒(IEVステップ)

バルブ、タイム

Xシンクロ

: 1/30秒以下

測光方式 TTL開放分割測光(6分割測光、中央重点測光、スポット測光)

露出補正 ±3EV: 1/3ステップ、露出補正ダイヤルでセッテ

ト。ファインダー内バーグラフ表示

大きさ : 185.5mm(幅)×151mm(高)×106mm(厚)

質量(重さ)

: 1660g

発売日 : 11月26日発売

価格 : メーカー希望小売価格 290,000円(税別)



デサント

進化形スノースタイルウェア「カービング」

株式会社デサントでは、ストリートカジュアルのトレンドと、スキーウェアに必要な高性能を併せ持った、進化形スノースタイルウェア「カービング」の99年ウィンターコレクションを販売いたします。スキーやスノーボードといつても、ウインターバスケット以外に、カジュアルにも着こなせるクロスボードタイプのウェアです。シンプルなデザイン、クールなカラーリングがタウン感覚のウェアを実現させました。

[写真商品の説明]

肩から袖にかけてのラインと、ボックス型のシルエットというシンプルなデザインが、表地の素材感をいかしています。表地はドライ感と膨らみ感を併せ持つスパン素材。また、織りに使われる糸には、高強力かつ耐熱性に優れたセボナーを使用し、新感覚ナチュラル素材を生み出しました。腕の動きをスムーズにする立体裁断により、雪上での激しい動きをサポートします。



ニコン

Nikon F100 新発売

継承された信頼性と、進化した機動力。撮影者の要求を追及したニコンF100。撮影者の視点から熟考された先進機能、より軽量化を図ったEYゆずりの一眼レフ。ニコンF100は、F5から継承した先進のAF機構をはじめとする高性能を、より小型・軽量にして堅牢なマグネシウムボディに凝縮したカメラです。測光精度をより高めた3D-10分割マルチパターン測光など、撮影者の要求をさらに追及しました。

12月26日発売予定。

ボディ本体価格(ストラップ・DK-8付) ¥190,000。

超音波モーター内蔵、2本のAF-Sズームレンズが新登場

AF-Sニッコールレンズシリーズに新たにAF-SズームニッコールED28~70mm F2.8D(IF)、AF-SズームニッコールED80~200mm F2.8D(IF)の2本のズームレンズがラインナップしました。AF-SズームニッコールED28~70mm F2.8D(IF)はフォトジャーナリストや一般ユーザーの使用に適した、標準系ズームの焦点距離をカバー。AF-SズームニッコールED80~200mm F2.8D(IF)はスポーツやポートレートなどさまざまな撮影シーンに対応する、高性能望遠ズーム。いずれも、ニコン独自のレンズ内超音波モーター(サインレーベル・モーター)駆動方式により、高速で静かオートフォーカスを実現しています。予測駆動フォーカス時のレンズ駆動性能も一段と向上しており、各種スポーツをはじめとする動きの速い被写体の撮影に大きな威力を発揮します。

◎AF-S Zoom Nikkor ED28~70mm F2.8D(IF) (来春発売予定)

主な仕様

焦点距離 : 28mm~70mm





ムとハッセルブラッド社との共同開発)が新発売されました。主な特徴は次の通りです。フォーカシングには高精度な二重像合致式の連動距離計を採用。レンズ交換に連動してファインダー倍率が自動補正されます。専用交換レンズには「TX45mm F4」と「TX90mm F4」を用意。定評ある高性能スーパーEBCフジノンレンズならではのクリアな描写力を加え、フルパノラマサイズに対応する広いイメージサークルを確保しています。撮影者の意図をダイレクトに反映させる「マニュアルモード」はもとより、「絞り優先AE」や「AEB」機能など使いやすい機能も盛りこんでおり、カメラ愛好家の方々のご要望にお応えするカメラに仕上がっておりまます。

メーカー希望小売価格(税別)
本体: 160,000円、45mm: 45,000円、90mm: 55,000円

★ ★ ★

コニカ

コニカカラーフィルム 新シリーズで新発売

コニカは、新聞発のISO感度800のカラー フィルムをはじめ、135サイズの4つの感度のラインアップを「CENTURIA(センチュリア)シリーズ」に統一し、新しいブランドとして1999年1月20日より新発売いたします。この「CENTURIAシリーズ」は、パッケージングを含め全世界統一ブランドとし、「銀塩写真の素晴らしさ」を強く訴求してまいります。

「CENTURIAシリーズ」は、LV・JXシリーズで培った品質の安定性を継承し、フィルムの基本性能である“色再現性・保存性”をさらに高める新技術によって生まれた全く新しいカラーフィルムです。(「CENTURIA400」は、現行品「JX400」のブランドおよびパッケージの変更です。)

今回、一斉新発売するカラーフィルムは、ISO感度が、100/200/400/800の4種類で、単品とパック品をラインアップしました。これら充実した商品構成により、お客様の選択のバリエーションをこれまで以上に拡大してまいります。

「CENTURIAシリーズ」の高い品質を実現した主な新技術は、以下のとおりです。

CENTURIA Crystal
ハロゲン化銀結晶の構造を精密に設計・制御した先進のハロゲン化銀結晶技術。

CENTURIA カブラー
最適な分子設計から開発された高い反応性と高い安定性を両立させた先進のカブラー技術(発色技術)。

CENTURIA DIRカブラー
現像時に放出される抑制 物質の拡散性を従来より制御やすくした先進の現像コントロール技術。

「CENTURIA」シリーズの主な特長は、以下のとおりです。
保存性の向上による有効期限の延長

フィルム生産時に設定される「有効期限」が、当社LVシリーズと比べ、3ヶ月間長く設定され「生保存性」が飛躍的にアップいたしました。撮影後の「潜像安定性」も向上し、ミニラボ等での処理がさらに取り扱いやすくなりました。

色再現性の向上
あらゆるシーンで優れた色再現が得られます。特に、「赤」「肌色」の鮮やかで自然な仕上がりが特長です。

実写感度のアップと露光ラチチュードの拡大
アンダーからオーバーまでのさまざまなシーンで優れた描写力を發揮いたします。

鮮銳性と粒状性の向上
LV200(現行)から鮮銳性と粒状性が大きく向上します。

★ ★ ★

富士フィルム

フルパノラマサイズにも対応した、35mmレンジファインダーカメラ「TX-1」新登場!

135標準サイズの撮影に加え、フィルムを約2コマ分使用する本格的なフルパノラマサイズ(24mm×65mm)にも対応する、レンズ交換式レンジファインダーカメラ「FUJIFILM TX-1」(富士フィルム)



独自の超高感度設計(CENTURIA 800)

超高感度でありながら、優れた粒状性・色再現性を実現し、あらゆるシーンの撮影に対応できるよう設計されました。具体的な優位点は、1. ウィンレッドやティールグリーン(青緑色)などの中間色を忠実に再現いたします。2. 蛍光灯下や蛍光灯下でストロボを使用するようなミックス光のもとでも自然に近い色のプリントに仕上がるよう開発いたしました。

ラボ処理 プリントレベルのユニチャネル性(CENTURIA 100/200/400/800)

「CENTURIA 100/200/800」のプリントレベルは、「CENTURIA 400」(=JX400)とほぼ同一です。

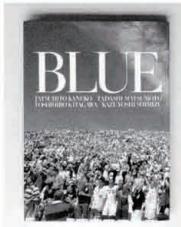


Information

「ニュージーランドハイキング案内」

滑田広志著

「山と渓谷社 定価3,900円」



「BLUE」

(ルース出版 定価3,200円)

松本正、北川外志廣、清水和良3氏の撮影によるワールドカップフランスマ大の写真集「BLUE」が発刊されました。3氏のベストショットと金子達仁氏の文章が長友裕典氏のディレクションで美しく仕上げられた、完成度の高い一冊です。

「ニュージーランドハイキング案内」

滑田広志著

「山と渓谷社 定価3,900円」



太古の昔から、大海によって下界と隔てられてきたニュージーランドには、独自に進化・成長してきた動植物が見られ、猛獣やヘビがない自然環境もあって「トランピング」と呼ばれるハイキング(キャンプ、トレッキング、登山)が盛んだ。ニュージーランドに20年通った著者が全踏破した中で、日本に紹介されている有名な「ミルフォードトラック」「ルートバーン」の他、日本人向きに、初級者の日帰りハイキングから、スペシャル編のクック山頂まで、バラエティに富んだお勧めの48コースを紹介。コース以外にも、タウンガイドや山小屋なども紹介した日本初のニュージーランドのハイキングガイドブックの決定版。

滑田広志氏ニュージーランド政府から感謝状授与。

滑田広志氏は、スキー、ラグビー、ハイキングなど、魅力的なニュージーランドの姿を各種メディアを通じて、約20年間にわたり日本に紹介し続けてきた功績をたたえられ、ニュージーランド政府観光局開局25周年レセプションの席上、女優の市毛良枝さん、真野響子さん、歌手の杏里さん、国文学者の金田一春彦ご夫妻、作家の立松和平さんとともに表彰されました。

編集後記

赤木真二

今回のAJPSアンケートを実施しました。全体としての回答率は48%にとどまりましたが、圧倒的に非会員の多い記者の方々から多くのお返事をいただきたいことに我々は感謝しています。記者27名中 AJPS会員は3名にすぎません。バスが取れずにチケット取材をされた方々からも、また70年代からの取材歴をお持ちの方々のベテラン記者の方々からも誠意ある回答が寄せられました。この場を借りて御礼申し上げます、有難うございました。我々編集委員が手がける会報もこれが最後です。3年間の皆様のご協力に感謝いたします。来たる1999年も実り多い年となりますように。。。

日本スポーツプレス協会会報 No.16

1998年12月26日発行

編集・発行人 水谷章人

編集スタッフ 赤木真二、山崎浩子、兼子慎一郎

竹内里摩子、荒川雅臣

萩原英士

日本スポーツプレス協会(AJPS)

〒112-0013

東京都文京区音羽1-21-10 関根ビル602

TEL 03-3946-9033

FAX 03-3946-9036

E-mail: ajpsjim@ibm.net

本誌掲載記事、写真を無断で転載することはできません

Canon

CREATE
PRO-LAB FOR CREATIVE PROFESSIONALS

 **DESCENTE**

FUJIFILM



HORIUCHI COLOR

Kodak

日本スポーツプレス協会

Konica

MINOLTA

Nikon

PENTAX

**SHASHIN
kosha**